



2023年06月 第21巻 第6号

かく語りき—聖人の言葉

愚か者は、自分という考えを思いつく。賢者は、自分という考えを築く根拠がないと知っている。かくして賢者は世界についての正しい概念を持っているので、悲しみによって織りなされるどんなものも再び解消する、しかし真理は残る、とうまく判断する。

…お釈迦様

インドで私はアドヴァイタ・ヴェーダーンタを一般の人々に教えるべきでないと言われる。しかし、私は子どもにさえそれを理解させることができる。至高の霊的真理を教えるのに早すぎるということはないのだ。

…スワミー・ヴィヴェーカーナンダ

有機体系での自己とは「便宜的な一時の幻惑」に過ぎない。それを無視したとき、あなたの自己という概念は拡張を始める。あなたは他者との霊的一体感を感じる。だから、どんな仕事をして、その成果は自分だけのものでは

なく、すべてに届くだろう。そして、「私」が何も残らず、すべてが「私たち」になる状態がやってくる。普遍性の中で自分自身がなくなるのだ。

…スワミー・ランガナターナンダ

今月の目次

- かく語りき—聖人の言葉
- お知らせ
- 2023年8月の生誕日
- 「全てのヨーガの共通点」
スワミー・メダサーナンダ
- 「お釈迦様の物語とたとえ話」
スワミー・ディッヴィヤーナターナンダ
- 6月例会
お釈迦様の生誕祝賀会の報告
- 6月月例会
ロニーさんを偲ぶ会の報告
- 忘れられない物語
- 今月の思想

お知らせ

各プログラムに参加を希望される方はご一報ください。

- 日本ヴェーダーンタ協会の行事予定

はホームページをご確認ください。

<https://www.vedanta.jp.com/>

2023年8月生誕日

スワミー・ニランジャナーナンダ

8月31日（木）

「全てのヨーガの共通点」 （後編） スワミー・メーダサーナンダ

靈的悟りは一度の生涯では不可能であり、二度三度の生涯が必要だ、と聖典には述べられています。しかし、私たちが先ほど読んだ『仏教聖典』にある逸話には、靈的悟りはわずか7日間で可能である、と述べられています。ただしその条件は、瞑想をやりつづけなければならない、というものです。そこで、この僧侶は試みたのですが、数分後には集中力が途切れてしまいました。

かつて、ドッキネッシュルの部屋で長時間瞑想をすることが習慣であったスワミー・アドブターナンダジーが、ある日、瞑想をかなり早く終わらせたことがありました。シュリー・ラーマクリシュナは「どうしたんだい？ なぜ今日はそんなに早く起きあがったのかね？」と尋ねました。ラトゥ・マハーラージは、「今日、私は、もしマザー・カーリーのヴィジョンが見えたらどんな恩恵をお願いしようか、と考えていました。そしたら、この考えが何度も

何度も頭の中に浮かんできて、集中するのが難しくなりました」と答えました。シュリー・ラーマクリシュナは、「だめだめ、瞑想中にはそんな欲望を抱いてはいけないよ」と言いました。つまり、ほんのわずかな欲求さえも集中力の障害になるのです。先ほど読んだ『仏教聖典』の逸話の中で師は、悟りを得るには7日間の瞑想で十分であるとおっしゃいました。しかし、神について途切れることなく一日考えるだけで、靈的悟りを垣間見ることができるかもしれせん。

ある若い男性がお釈迦様に関する映画を観たときの事です。映画には、お釈迦様が座って瞑想し、悟りを開いたことが描かれていました。お釈迦様の瞑想は10年間に及びましたが、映画はわずか2~3時間です。そこでこの映画を見た後に青年は「瞑想をしてみよう。そうすれば私だってすぐに悟ることができるだろう」と考えました。瞑想を始めて20~25分後に、青年は眠ってしまいました。早く悟りを開くという希望はあっという間になくなりました。つまり、靈的生活においては、幅跳びも高跳びもないのです。長い年月にわたり、靈的实践の定められた道程を一つ一つやらねばなりません。

今日の主題に戻ります。それぞれのヨーガに関する詳しい説明はあっても、これらのヨーガを組み合わせる、とい

う考えはどの聖典にも見当たりません。ですので、これはヨーガの理論と実践に関するスワミー・ヴィヴェーカーナンダの比類なき貢献であったと言えます。そして、この組み合わせ案では、それぞれのヨーガを極端に行う必要はなく、自分の能力と適性に応じて各ヨーガの一部を組み合わせることができます。また、もし求道者が一つのヨーガを他のすべてのヨーガをせずに行う場合、その実践は一本調子になる可能性もあります。だから、さまざまなヨーガを組み合わせると面白くなるのです。そしてそれによって最高の悟りを得ることができます。しかし献身と信仰を持って最後までやり続けなければなりません。

私は多くのラーマクリシュナ僧団の先輩僧を見てきました。彼らは厳しい靈性修行はせず、ラーマクリシュナ僧団のスワミージーが定めたスケジュールに従うだけでした。そして彼らの靈性は傑出していたのです。長い間、瞑想だけをしようとする、世俗的なことを考え始めたり、眠りに落ちるかもしれませぬ。なぜなら、そのような瞑想をする準備ができていないからです。さらに、多忙な生活を送っている人のほとんどは、瞑想に長時間費やす余裕がありません。したがって、私たちのほとんどにとって、さまざまなヨーガを組み合わせるということは、安全かつ実行可能なことな

のです。

ここで面白い質問をします。すべてのヨーガに共通するものは何でしょうか？ すべての宗教が、人間の命は神の偉大な贈り物である、と宣言していることです。ヒンドゥ教の聖典には、非常に多くの誕生を経て幸いにも人間に生まれることができる、と書いてあります。人は、人間として生まれたこの貴重な機会を悪用するのではなく、この人間としての命を活用しなければなりません。動物と人間を比較してみれば、人間として生まれることがいかに特別なものであるかがわかります。動物は単に、食べる、寝る、生殖という感覚を満足させるために生活しています。さて、人間は、動物にはできない自己成長ができます。人間は、至高の真我を悟るに至るまで、それによって人生の充実感を得ることができるに至るまで、自己成長ができるのです。これらのすべての贈り物は特別なものです。さらに、世俗的な観点から見ると、人間は新しいものを発明することができます。多くの動物にも知能はありますが、それは発明ができるような知能ではありません。人間とは異なり、動物には道徳と不道徳、靈的なものと世俗的なものを識別する能力がありません。したがって、私たち人間がこれらすべての贈り物を持っているのに活用しないのは、大きな損失なのです。

『シュリー・ラーマクリシュナの福音』には、ラーマチャンドラが弟のラクシュマナに「象はとても大きいのに、神のことを考えられない」と言ったと記されています。シャンカラチャーリヤもまた、人間としての命、神を悟りたいという願い、そして聖なる交わり(Holy company)という三つのものは、得ることが難しく、神の恩寵によってのみ得られる、と述べています。

すべてのヨーガに共通する第二のことは、すべてのヨーガが「至高の真我の悟りが人生の目的である」と言っていることです。そして、第三の共通点は、たとえ方法は違って、結果は同じである、つまり、ハートの結び目をバラバラに切り、恐れを知らず、喜びと平安に満たされ、最高の知識と自由が得られるということです。

そして、すべてのヨーガに共通するもう一つのことは、「実践が大事」ということです。どのヨーガも、聖典を聞いたり読んだりするだけで霊的に進歩できるとは言いません。したがって、どのようなヨーガを実践するとしても、それを実行に移さなければなりません。休むことなく長期に渡る実践です。

最近では、YouTube などのオンラインで多くの講義を見ることができ、それらに簡単にアクセスして視聴できます。しかし、ただ楽しむために聞いている

だけでは、価値のあることは何も起こりません。霊性の話を聞くのは良いことですが、聞いたことをよく考えて実践すべきです。さらに、一次資料をよく調べることをせず、話を聞きすぎることにはある危険があります。

だから実践が大事なのです。牛乳の入ったコップを目の前に置いて「バター、バター、バター」と言っても目の前にバターはあらわれません。バターを得るには、牛乳を凝乳にしてから攪拌してバターを取り出さなければなりません。今、質問は、何を実践するか、です。たくさんありますが、二つのことだけに焦点を当てるべきです。まず最も重要なことは、心の浄化です。シュリー・ラーマクリシュナはよく「チッタ シュッディ」と言いました。『シュリー・ラーマクリシュナの福音の用語検索(Concordance to the Gospel of Sri Ramakrishna)』という本があります。その本から私は「心の清らかさ purification of the heart」という表現が『福音』の中に何回出てくるのか調べてみたところ、15~16回出てきていることが分かりました。

主イエスもたとえ話の中で「もし地面が整っておらず、とげの藪や岩でいっぱいなら、どんなに良い種を蒔いても良い作物を収穫することはできない」と言いました。これは象徴的です。主イエスがこのたとえで伝えたかったこ

とは、心の清らかさです。それがなければ、私たちがいかなる霊的実践を行っても、結果は得られません。したがって、すべてのヨーガは心の清らかさを非常に重要視しています。

心の清らかさとはどういう意味でしょうか？ 『シュリー・ラーマクリシュナの福音』にはこんな物語があります。ある村に一人の男の子が住んでいました。彼は学校に通うために森を通らなければなりません。その子は一人で森を歩くのが怖かったのである日、そのことを母親に訴えました。母親は、「心配しないでいいのよ、あなたの兄のマドゥスダンが森の中にいるのですから。怖くなったらいつでも彼を呼びなさい」と言いました。

男の子は母親のアドバイスどおり、森を通るときは必ずマドゥスダン兄さんと呼びました。するとマドゥスダンがあらわれて学校まで付き添ってくれたのです。毎日こんなことが起こりました。あるとき、男の子の先生の家で式典がありました。先生は各生徒に、財力に応じて食べ物のお供え物を持って来るように言いました。その子はとても貧しかったのですが、母親に「供物をください」と言いました。母親は何も持っていませんでしたので、その子に「マドゥスダン兄さんに供物をお願いしなさい」とだけ言いました。その子はマドゥスダン兄さんに会うと、「式典

のために先生の家を持っていく食べ物のお供え物をください」と頼みました。マドゥスダン兄さんは彼にヨーグルトの入った小さな土製のポットを渡しました。

その子が先生の家に着き、その小さなポットを先生に渡すと、先生は非常に怒りました。なぜなら、それはとても貧相な小さなヨーグルトの入ったポットだったからです。しかしその子は、「ボクのマドゥスダン兄さんは、『ポットが空になればすぐにまたいっぱいになる』とおっしゃいました」と言いました。驚いたことに、先生が試しに凝乳を全部別の容器に移し替えた瞬間、小さなポットは再びいっぱいになりました。このようなことが何度も起こりました。

そこで先生は男の子のマドゥスダン兄さんにとっても会いたくなかったので、その子に森と一緒にいくように頼みました。彼らが森に着くと、男の子はマドゥスダン兄さんと呼び始めましたが、マドゥスダン兄さんはあらわれませんでした。その子が何度読んでも、マドゥスダン兄さんは来なかったのです。その子は泣き始めました。その時、声が聞こえてきました「おまえの心は清らかだから私を見ることができののだが、先生の心はまだ清らかではないので、私のヴィジョンを見る準備ができていないのだよ」。

ここでのポイントは、チッタ シュッディ、心の清らかさです。神は私たち全員にとって最も近い存在です。しかし、私たちは心が清らかではないので、神を見ることができません。次に、鏡の例も挙げます。鏡のガラスがきれいであれば顔が見られますが、汚れが溜まっていると顔を見ることができません。別の例は、湖の水です。水が汚れていると湖底は見えません。湖底を見るには二つの条件が必要です。まず、クリーンであること、そして波がなく穏やかであることです。しかし、私たちの心には、ヴリッティという思考の波があり、それは絶えず心の中に湧き上がってきます。

パタンジャリのヨーガ・スートラは、「ヨーガシュ チッタ ヴリッティ ニローダハ：『ヨーガとは、真我を知覚することを妨げている心（チッタ）がさまざまな形（ヴリッティ）をとるのを抑制することである』」から始まります。したがって、霊的生活の実践はすべて、これらの波を静め、心を静めるためです。この波とは何でしょうか？ 執着の波、欲望、嫌悪、怒り、エゴ、嫉妬の波。それが私たちの心の状態であるなら、心はどうやってアートマンを反映できるのでしょうか？

だからこそ、シュリー・ラーマクリシュナは、「心を清らかにしない限り、霊

的生活で進むことはできない」と何度もおっしゃったのです。ですので、霊的生活の最も重要なことは、アートマンを反映できる心の鏡をどのようにしてきれいで純粋なものにするか、ということなのです。

『バガヴァッド・ギーター』には、心の中に不純さがいかにして発生するかが述べられています。欲望（カーマ）、怒り（クローダ）、貪欲（ロバ）、利己主義（アハンカール）。これらは不純さの主な印です。これらすべての根本的な原因は何でしょうか？ シュリー・ラーマクリシュナは、それらすべての根本的な原因は「未熟な私」だとおっしゃいます。それはどういう意味でしょうか？ 私たちが自分自身を体と心と同一視した瞬間に、問題が始まります。霊的な無知によって、自分をアートマン以外のものと同一視した瞬間、私たちはマーヤの網目に巻き込まれてしまうのです。ですので、私たちはこのことに気づき、体と心との同一視をやめるように努めなければなりません。

それを達成するにはどうすればよいのでしょうか？ 各ヨーガが定める理論は異なります。基本的には二つあって、一つはギャーナ・ヨーガの方法で、もう一つはバクティ ヨーガの方法です。ギャーナ・ヨーガの方法を実践する資格のある人はほとんどいません。なぜなら私たちの大部分は非常に体意識が

強いからです。そして、体意識がある程度低下しない限り、たとえ「私はアートマンである」と何千回繰り返しても、アートマンは私たちに明らかにされません。

もう一つの道はバクティの道です。その方法は、私たちの思考、行動、情緒、感情のすべてを、神、自分が選んだ理想神、に結びつけることです。言い換えれば、私たちの日常生活を神性化することです。それは大多数にとって、より簡単な方法です。私たちがアートマンやブラフマンと言うとき、それは非常に精妙なので、私たちのほとんどにとって、そのイメージははっきりしていません。シュリー・ラーマクリシュナ、クリシュナ神、ラーマ神、あるいは主イエスを自分の霊的生活の中心とする方が簡単です。なぜなら、私たちは彼らの写真を見たり、彼らの人生について知っているからです。

バクティの道では、私たちはすべての人、すべてのものの中に神の存在を見なければなりません。これが私たちの心を純粹にする最も効果的な方法です。一旦 チッタ シュッディに到達すると、他の霊的実践は容易になります。私たちは仕事をするときはいつでも、自分は神の道具として仕事をしていると考えるべきです。仕事を終えた後、私たちはその成果を神に捧げることができます。食べ物を食べる前には、ま

ず食べ物を神に捧げましょう。朝起きた後、私たちは神の絵を見て神にお辞儀をして、寝る前に再び神にお辞儀をしましょう。このようにして、私たちは日々の生活を通して自分の活動、思考、行動を神と結びつけ、心の中で神の御名を一日中唱えるようにしましょう。

スワミー・アショカーナンダジーは、ラーマクリシュナ僧団の学術僧であり、南カリフォルニアのヴェーダーンタ協会の会長でした。彼の講義の一つに「日常生活の神性化」がありますが、そこで彼は私たちがいかに「日常生活を神性化」すべきかについて、美しく説明しています。私たちが日常生活を神性化することができれば、チッタ シュッディが容易になり、神に心を集中することができ、そして神を悟ることができるでしょう。

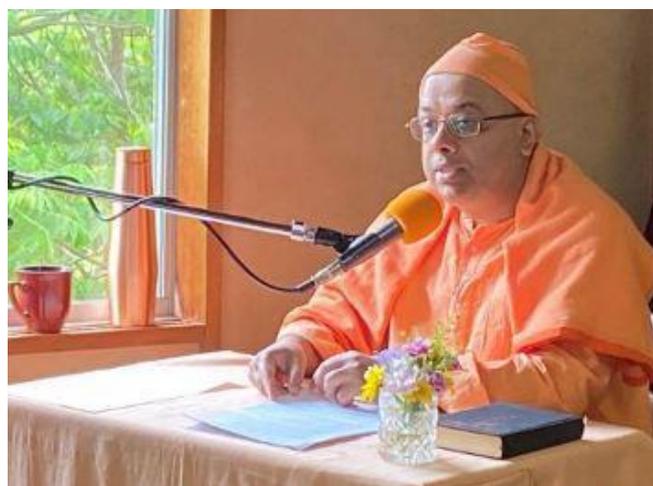
(終わり)

「お釈迦様の物語とたとえ話」

スワミー・ディッヴィヤーナターナ ンダ

「ブッダ」という言葉は、実際には「悟りを開いた人」を意味します。ゴータマ・ブッダとして世界に知られるアジアの偉大な預言者は、スッドーダナとマーヤ・デーヴィの間にシッダールタとして生まれました。スッドーダナは釈迦族の長でした。その王国の贅沢な

生活もお釈迦様を長く繋ぎ止めておくことはできませんでした。ある日、宮殿の外に出たときお釈迦様は、病人、老人、死体を目にしました。人生で初めてそれらを見た彼の意識は揺さぶられ、人生の目的について深く考えました。なぜなら、人間の人生には数え切れないほどの苦しみがあり、それらはきっと自分にも訪れるだろうと感じたからです。そして、人生の目的とは何か？なぜ人は苦しむのか？苦しみを取り除くことはできるだろうか？と考えました。これは偉大な人物の突出した特徴です。彼らは通常の仕事や状況を私たちとは異なる視点で見るとのことです。



シュリー・ラーマクリシュナがドッキネッションで聖母バヴァタリーニを崇拜し始めたとき、彼は「この『母』は本物だろうか、それとも粘土の像にすぎないのだろうか？」と自問しました。「彼女は本当に供え物に召し上がっているだろうか？彼女は私たちの祈りを聞いてくださっているだろうか？」このような種類の質問が私たちの心に

浮かぶことはほとんどありません。シッダールタ王子は宮殿の贅沢さに極度の嫌悪感を抱き、自分が探している疑問の答えを見つけ出すことを切望するようになりました。そして、彼は世を捨てて隠者になったのです。彼は真実を知るために極度の辛苦に耐えました。彼の体はボロボロになりました。ついに彼は、極度の肉体的辛苦をなめても、どこにも到達できない、だから中道を歩まなければならない、ということに気づきました。彼は最終的にブッダガヤで涅槃（ニルヴァーナ）に達しました。ブッダが得た真理とは「人生全体の根底にある真理とはすなわち、人生は苦しみに満ちている（苦諦）、煩惱が苦しみの原因である（集諦）、煩惱を滅ぼすと苦しみは終わる（滅諦）、正しく生きることで煩惱は滅ぼされる（道諦）」というものです。これらは四大真理（四聖諦）として知られており、彼の教えはこれら四聖諦に基づいています。

そして彼は、自分の意識の深い部分から受け取った真理を全人類に共有することを決意しました。彼はベナレス近郊のサールナートで最初の説法を行い、その後ゆっくりとインドのさまざまな地域へ赴きました。悪評高い人や一般の人だけでなく、多くの王や教養ある男女も彼の弟子になりました。また、彼の妻と息子も出家して比丘（修行者）になったのです。ブッダの名声

は世界の他の地域にも広がりました。
彼は80歳まで生きました。

ブッダは儀礼や儀式をあまり重視せず、代わりに道徳と倫理を重視しました。彼の教えはシンプルで実践的でした。

ゴータマ・ブッダは説法の中で面白い逸話やたとえ話をよく用いました。今日はそれらのたとえ話のいくつかをお話します。

あるところに金持ちの愚か者がいました。ある時、隣人が3階建ての建物を建てたので、嫉妬して自分も同じような建物を建てることにしました。そこで大工を呼んで、何が欲しいのか説明しました。大工はまず建物の基礎を作り、次に1階、その次に2階を作りました。この時点で金持ちの男はじれなくなったと言いました。「どうして全部を作らなくちゃいけないのだ？ 私は3階だけを作ってほしい、それだけなんだ！！」

この物語は、目標があるならまず基礎を整える必要がある、ということをお話してくれます。初めの一步からやらなければ、結果は出ません。最初のステップを無視して、やみくもに取り組んでいては、目標に到達することはできません。

悟りを求める人々のために、ゴータ

マ・ブッダは三つの実践方法を定めました。行動規範(戒)と正しい集中(定)、そして智慧(慧)の三学です。たとえば、農夫が収穫を得るには、まず田を耕し、田を整えば水を引き、最後に種をまきます。時々生えてくる雑草を丁寧に取り除く、それを何日も根気よく続けます。今日に土地を耕し、明日に種を蒔き、明後日に刈り入れることなどできません。

農夫が良い作物を得るためには辛抱強くあらゆる大変な労働をするのと同じように、悟りの道を歩む人は、人徳を養うことで心を耕し、識別の助けを借りて悪い欲望を取り除かなければなりません。それから集中力と智慧の種を蒔きます。この過程を道に沿って進めば、やがて悟りに達するでしょう。

悟りを求める時、人は目標に焦点を合わせ、大切な目標へと向かわせる実践を配置すべきです。そしてその目標から離れないように注意する必要があります。この事実を説明するために、ブッダはこのようなたとえ話をされました：

水の流れに乗って運ばれている木の丸太は、地面に落ちたり、誰かに持ち去られたり、腐ったりしなければ、いつかは海にたどり着くだろう。同様に、悟りを探求する者はマーヤの罠に注意し、非実在のものの外側の美しさに惑わされないようにすべきです。時々、

靈的探求者は厳しい苦行を重要視しすぎて自分の体を苦しめますが、靈的生活の大きな進歩ができません。一方で、求道者の中には、放棄したことをいたずらに栄光だと思い上がっている人もいます。ですので、これらに巻き込まれないように注意してください。これらを念頭に置いて靈的实践を怠りなく行えば、最終的には涅槃に至ることができるでしょう。巻き込まれるのは、注意を怠り、識別せず、目的よりも方法に熱中している人だけです。

悟りを求める探求者がこの人生の旅を行くとき、多くの不快なことに遭遇し、それが心に一時的な混乱を引き起こすでしょう。ではどう対処すべきでしょうか？ このことを説明するために、ゴータマ・ブッダは次のように言いました：

人には3種類ある。一つ目は岩に刻まれた文字のような人。彼らが怒ると、その怒りと恨みは彼らの心に永久に刻み込まれます。二つ目は砂の上に書いた文字のような人です。砂に書かれた文字は、すぐに消すことができるように、彼らは怒ることもありますが、その怒りはすぐに消えてしまいます。三つ目は水に彫られた文字のような人です。水に彫られた文字は一瞬たりとも痕跡を残さないように、悪口や批判も彼らには触れることすらありません。彼らは少しも影響を受けないのです。

私たちの生活や周囲の世界には、暑さと寒さ、喜びと悲しみ、金持ちと貧乏、などのような正反対の力の働きがあります。私たちは常にそれらに適応しなければなりません。人生はいつも甘くて素晴らしいものとは限りません。不穏な状況が生じた場合、私たちは忍耐強くそれに向き合い、我慢しなければなりません。ブッダは次のように例えました：

ある時、ヘビの頭と尾の間で争いがありました。尻尾は「頭がいつだって先に行くのはだめだ」と主張しました。頭は「尻尾がそんなことを言うのはばかげている、尻尾が常に後ろにいるのは当たり前じゃあないか。そこにいろよ」と言いました。そこである日、両者の間で綱引きをしました。最終的にヘビは二つに分かれて終了しました。

ブッダご自身は厳しい苦行を遂げた後、あまりにも厳しい苦行をしてもどこにも導かれない、と感じました。そこで、苦行をしすぎない、楽をしすぎない、中道を選択することになりました。このようなたとえ話があります。

ある時、シュローナという名の靈的求道者がいました。彼は悟りを開くことを熱心に求めていたので、厳しい肉体的苦行を行いました。ついに体から出血が始まりました。これを見た師はシュローナに「豎琴を見たことがあるかね？ 締めすぎても正しい音が鳴らな

いし、緩めすぎても正しい音が鳴らない。つまり、求めている音を出すには、調律が最適でなければならないのだよ。それと同じように、肉体的苦行を行うとき、中道を歩むことを心に留めておく必要がある。あまりにも厳しい苦行は体と心を弱らせる。また贅沢に溺れると、人生は気楽で心は浅薄になり、悟りへの熱意は減るのだ」と言いました。

次の説明は、鉄の意志と決意が不可能を可能にするという事実を強調しています。

ある時、ヒマラヤ山脈の竹林の中に、一羽のオウムが住んでいました。他にもたくさんの鳥や動物が平和に暮らしていました。ある日、竹と竹が擦れ合って火が発生し、火災は急速に広がり始めました。鳥や他の動物たちは命を守るためにあちこちに逃げ始めました。しかし、オウムは火を消すための方法を探しました。近くに大きな池があったので、オウムはすぐにある計画を思いつきました。オウムは池まで行って池の水に浸かり、火事の場所に戻ってきて、そこに水を滴らせ始めました。何度も何度もそこに行き、同じことを繰り返しました。天の神があらわれて「あなたは良い心をしていますが、そうすることでなんとかなると思っているのですか？」と言いました。するとオウムは、「純粹で強い意志さえあれば、

この世にできないことはなにもありません。必要ならば、来世でも続けるつもりです」と答えました。神はお喜びになり、神聖な力でその山火事を消しました。

同様に、何百万もの誕生で生じたカルマは一度の誕生で一掃することができます。それは、固い決意で務めをやり遂げるために全身全霊を注ぎ、そして神のもとに避難するときに可能となります。靈的悟りの道には、自己努力と神の恩寵の両方が必要です。

ある王国では、年寄りを遠い山奥に捨てる風習がありました。その王国の大臣の父親も年老いていましたが、大臣は父親をその山に連れて行くが辛かったので、地下に洞窟を掘って隠しました。

ある日、神が王の前にあらわれて質問しました。「二匹のへびがいて、その雌雄がわかるか？ どうすれば見分けられるか？」王は当惑して答えることができませんでした。そこで王は、この質問に答えられる人には褒美を与えることと知らせました。大臣は父親が非常に賢いことを知っていたので、父親のところに行ってその質問をしました。父親は、「騒がしく動くのが雄で、動かないのが雌である」と言いました。(※仏教聖典 P267)

次の質問は「2頭の馬を飼っていて、1頭は母馬、もう1頭はその子馬である。子馬が成長して母馬と同じ大きさの時、母馬と子馬をどうやって見分けるか？」でした。王は答えを見つけることができず、大臣に助けを求めました。大臣は再び父親のところに行くとき「干し草を与えればわかる。干し草を子馬に与えている方が母馬である」という答えが返ってきました。さらに、「眠っている者に対しては覚めているといわれ、覚めているものに対しては眠っているといわれるのは誰であるか？」という質問に対しては、「それは悟りの修行をしている者である。悟りへの道を歩み始めていない人々と比べるとその人は覚めているが、すでに悟りに達した人々と比べるとその人は眠っている」という返事でした。

王はその答えにとっても感銘を受けました。大臣の父親がそれらの質問に答えていることを知ったとき、王は老人を山に捨てるのは間違いであることに気づき、そのおきてをやめました。

ある村に両親に育てられた少年がいました。やがて父親が亡くなり、その後母親と二人で暮らしました。しばらくして、その少年は結婚しました。最初は幸せに暮らしていましたが、すぐに母親と妻の間に誤解が生じ始め、それが悪化して義母は家を出て別々に暮らし始めました。

しばらくして、この夫婦に子供が生まれました。すぐに、嫁が、「姑が家にいる間は、家族にいいことは何も起こらなかったけれど、別居をすると子供が生まれた」と皆に吹聴しているという噂が姑に届きました。これを聞いた姑は非常に心がかき乱されました。そして大きな怒りが沸き起り「この世から正義が消えたようだ」と言いました。姑は葬儀をして「正義」を火葬しようと思いました。そこに神があらわれて、さまざまな方法で彼女を止めようとしたが無駄でした。そこで神は、「では、孫と嫁を火葬しよう」と言いました。

その時、姑は自分の間違いに気づき、神に許しを請い、嫁と孫をお守りください、と頼みました。

その時、嫁も自らの過ちに気づき、火葬墓地に行き姑を家に連れて帰りました。

スジャータはアナタピンダという裕福な商人の妻でした。スジャータは傲慢で口うるさく、些細なことで家族とよくケンカをしました。ある時、ゴータマ・ブッダがたまたま彼らの家を訪れ、スジャータの傲慢な態度を知りました。ブッダはスジャータに向かって言いました。「スジャータ、知っているかい、妻には七つのタイプがあるのだよ。一つ目は殺人者のような妻。彼女の心は不純で夫を尊重しない。そ

の結果、別の男に心を向けてしまう」

「次に、泥棒のような妻。彼女は夫が苦勞して稼いだお金を贅沢や肉体的な快適さのために使い、必要であればお金を盗むことさえする」

「師のような妻もいる。彼女は家庭を支配し、夫よりも優位に立っている。彼女はよく夫を厳しい言葉で叱る」

「母親のような妻もいる。彼女は夫の世話をし、自分の子供のように扱っている」

「それから姉のような妻、友達のような妻もいる。どちらのタイプも、行動は控えめで、夫の世話をきちんとし、重大な局面では適切な手助けをする」

「最後に、下女のような妻がいる。彼女は夫や他の家族に誠実に仕える。彼女は何の期待も恨みもなく、黙って家族に仕える」

そして尊師は、「スジャータよ、あなたはどの部類に属するだろうか？」と言いました。スジャータはすぐに自分の間違いに気づき、「私も最後の人のようになりたいです」と言いました。

その後、スジャータはゆっくりと自分の行動を改め、夫によく仕え、二人で悟りを求めました。

6 月例会

お釈迦様の生誕祝賀会の報告

例会において、お釈迦様の誕生日を祝いました。お釈迦様のお写真を花で飾り、食べ物をお供えし、全員で三帰依と唱えました。

ブッダン シャラナン ガッチャーミ
仏に帰依し奉る

ダンマン シャラナン ガッチャーミ
法に帰依し奉る

サンガン シャラナン ガッチャーミ
僧に帰依し奉る

続いてお釈迦様の教えを朗読しました。詠唱と朗読の様子は、協会のチャンネルの YouTube で視聴可能です。





6 月月例会

「ロニーさんを偲ぶ会」

午後のセッションでは、ロニー・ハーシュ氏を偲ぶ会が開催されました。彼は 30 年近くにわたりヴェーダーンタ協会の親しい信者でしたが、今年 4 月 24 日に亡くられました。彼は英語の月刊ニュースレターの最初の編集者であり、約 20 年間にわたってその仕事を手際よくこなさいました。彼はスワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会の組織委員会のメンバーで、プロの歌手でもありました。ロニーさんの妻である敏子さんも出席してくださいました。スワミー・メーダサーナンダ・マハーラージと数人の信者は、ロニーさんと過ごした楽しい時間の思い出について語り合いました。シャンティさんはロニーさんとの古い写真を使った素晴らしいオーディオビジュアルを用意してくれました。



忘れられない物語

「お釈迦様とアーナンダ」

仏教の伝統によれば、アーナンダはお釈迦様の従弟で近しい弟子であった。

アーナンダはお釈迦様の付き人を務め、お釈迦様への帰依と深い敬愛で知られていた。ある日、アーナンダはお釈迦様のもとへ行き、「尊師よ、あなたに匹敵する人は誰もいません。あなたは最高、最良、至高の師です。あなたのような人はこれまでに存在したことはありませんし、これからも決して存在しないでしょう」と賛辞を述べた。アーナンダはお釈迦様が最も偉大であると信じていたので、敬意と称賛の意を表したのである。

するとお釈迦様はアーナンダにこう尋ねることでお答えになった、「おまえは私をこのように知るか、『世尊は、完全に悟りを開いており、真の知識と行為に達しており、幸運であり、世界を知る者、従順な人々の卓越した指導者、諸天と人間の教師、悟りを開いた者、祝福された者である』と？」

アーナンダは、このようにお釈迦様の心を完全に知っているわけではないことを認める。お釈迦様はさらに、過去、現在、未来におけるすべての仏陀たちの心を知っているか、とアーナンダに尋ねると、アーナンダはそのような知識を持っていないと認める。

次に、お釈迦様はアーナンダに、宇宙全体のすべての仏陀たちと彼らの心についての完全な知識なくして、誰かを最も偉大であると判断したり宣言した

りするのは不適切である、と説明する。お釈迦様は、誰かを最も偉大だと宣言することは、すべての悟った存在に対する包括的な理解に基づくべきである、と強調しているのだ。

これらの質問を投げかけることで、お釈迦様はアーナンダに、自らの知識の限界と霊的領域の広大さについて熟考するよう導く。お釈迦様は、ご自身の功績を否定したのではなく、悟りを開いた存在の偉大さを考える際に求められる、適切な視点と謙虚さについてアーナンダに教えたかったのである。

今月の思想

第一に、強い哲学的信念。第二に、実際に自分の見方を変える努力。誰かが通り過ぎるたびに、「神ご自身がこの人の姿で通っておられる」と思い起こしなさい。その後にはあなたは「この人の姿で」とは言わず、ただ「神ご自身が通り過ぎておられる」とだけ言うようになるだろう。話声を聞けば、「神ご自身が話しておられる」と言い、顔を見て、その目を見つめ、「神ご自身がその目を通して私を見ておられる」と言い、「私と握手をしてくださっているのは神です」と言う。あなたはこれらのことを確信しなければならない。次に、あなたは、真逆の傾向、信念、本能をすべて破壊しなければならない。 …

奮闘の段階が終わった後、母の笑顔の中に新たな資質があらわれ、子供たちが彼女を非常に愛するときがくる。彼女が新しい方法で話しかけると、彼らのハートの奥深くに入る何かがある。夫や親戚や友人もそう感じる。確かに、それは相変わらず面白いものではないが、全ての人にとってそれは魅力の源となり、誰もが彼女と一緒にいるのが楽しいと感じる。

…スワミー・アショカーナンダ

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp